

葬りの日のための香油

ヨハネの福音書 12 章 1-11 節

はじめに

今日の聖書箇所は、「**過越の祭りの六日前**」に起きた出来事が書かれています。イエス様が十字架で死なれるのは、「過越の祭り」ですから、今日の聖書箇所の出来事は、イエス様が十字架で死なれる約一週間前の出来事と言えます。

イエス様は、「**ベタニア**」という村に住んでいた「**ラザロ**」という人を死人の中からよみがえらせました。ラザロは病気にかかって死んで、墓に葬られていました。しかしラザロが死んで四日も経った後、イエス様が墓に向かって「ラザロよ、出て来なさい」と大声で叫ぶと、なんと！死んだはずのラザロが墓から出て来たのです。

このラザロに起こった奇跡をきっかけに、多くのユダヤ人がイエス様を信じるようになったのです。しかしユダヤ人の政治的・宗教的な責任を持つ最高議会は、「このままイエスの影響力がユダヤ人の間に広がれば、暴動が起きる。暴動が起きれば、ユダヤ人全体がローマ帝国に滅ぼされてしまう」そう考えて、最高議会はイエス様を殺すことを決めたのです。そしてユダヤ人の間に、「イエスがどこにいるかを知っている者は報告するように」という命令まで出したのです。そのためイエス様は、ユダヤ人の間を公に歩くことができなくなり、しばらく荒野の近くに身を隠しておられたのです。

しかしイエス様は、過越の祭りの六日前に、再び「ベタニア」に戻って来られたのです。そして、死人の中からよみがえったラザロとその姉妹であるマルタとマリア、そして弟子たちと共に夕食の席に着いたのです。

1. 給仕をするマルタと香油を塗るマリア

この夕食の準備していたのは、ラザロの姉のマルタです。マルタはいつも人をもてなす女性でした。ルカの福音書 10 章でも、マルタはイエス様を家に迎え入れたことがありました。しかし、その時マルタは、もてなしが忙しくなって思い煩い、心を乱してしまいました。そして、もてなしの手伝いをしないで、イエス様の話に聞き入っている妹のマリアを批判しました。その時マルタは、イエス様にこう言われました。「**マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません**」(ルカ 10:41-42)。

過去の失敗を懐かしく思いながら、マルタは今日の聖書箇所でも、イエス様をもてなすのです。マルタはもはや昔のマルタではありません。今回は、思い煩ったり、心を乱すことなく、喜びをもってイエス様をもてなすのです。

しかし妹のマリアは、ある意味で相変わらずです。前回は、姉のマルタがもてなしている時に、自分はイエス様の話に聞き入っていました。今回は、姉のマルタがもてなしている時に、イエス様の足に香油を塗り、自分の髪の毛でその足をぬぐったというのです。マリアがイエス様の足に塗った香油は、「**純粋で非常に高価なナルドの香油**」でした。マリアは、その香油を「**1 リトラ**」、つまり 328g を一気にイエス様の足に注いだのです。マリアが注いだ 1 リトラのナルドの香油は、「**300 デナリ**」の価値があったと 5 節に書かれています。1 デナリが当時の労働者の一日分の賃金に当たります。そうであれば、「300 デナリ」というのは、当時の労働者の一年分の賃金、つまり年収に当たります。今で言えば、300 万円あるいは 400 万円ぐらいでしょうか。マリアは突然、その 300 万円あるいは 400 万円もする高価な香油を、イエス様の足に一気に注ぎ始めたのです。

2. 盗人であるイスカリオテのユダ

前回のマリアの行動には、姉のマルタが批判しました。しかし今回のマリアの行動に対しては、姉のマルタではなく、イエス様の弟子の一人である「**イスカリオテのユダ**」が批判するのです。彼は、5 節でこう言います。「**どうして、この香油を 300 デナリで売って、貧しい人々に施さなかったのか**」。ユダにとって、マリアの行動は、香油の無駄遣いに思えたのです。イエス様の足に塗るよりも、お金の替えて貧しい人々の生活を支えたほうが、よっぽど効率的・効果的な使い方だと考えたのです。

しかしユダのこの言葉は表向きでは正論を言っているようですが、6 節を見ると、ユダの心の中が見えてきます。「**彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった**」。ユダは、正論を言っているようですが、決して貧しい人々のことを心にかけていたのではなかったのです。彼は、お金が欲しかったのです。彼は、イエス様の弟子たちの「金入れ」を預かっていました。つまり彼は、会計係だったのです。しかし彼は、その「金入れ」から、お金を盗んでいたのです。最初は少しだけ盗んでいたのかもしれませんが。しかし次第にその盗む金額は増え、みんなにバレないように、穴埋めをしなければならなくなったのでしょう。そんな時に、マリアが 300 万円も 400 万円もする高価な香油を、目の前でイエス様の足に一気に注いだのです。ユダは思ったでしょう。「なんてもったいないこと！これがあれば、盗んだお金の穴埋めができたのに！」。表向きでは、「これがあれば、貧しい人々に施しができたのに」と言いましたが、心の中では「これがあれば、盗んだお金の穴埋めができたのに」と思っていたのだと思います。お金に困った彼は、この後、イエス様を最高議会上に売って、銀貨 30 枚を手に入れます。

ユダはお金に囚われている人でした。お金に囚われて、最終的にはイエス様を裏切ってしまうのです。お金が彼の人生を狂わせたのです。それに対して、お金に全く囚われていない人がいます。それがマリアです。マリアは、300 万円も 400 万円もする高価な香油を、イエス様の足に一気に注ぐことを、少しも惜しいとは思わないのです。

3. マリアがイエスに香油を塗った意味

では、マリアはなぜイエス様の足に高価な香油を注いだのでしょうか。一つは、イエス様への感謝でしょう。マリアはイエス様に、弟のラザロを死人の中からよみがえらせてもらったのです。死んだと思った弟を、よみがえらせてもらったのです。マリアにとって、これほどの感謝はありません。

もう一つは、イエス様への愛です。イエス様は、十字架で死なれる直前、弟子たちへの愛を表すために、弟子たちの足を洗われました。「足を洗う」というのは、その人への愛を表す表現なのです。当時の人の足は、今のように立派な靴はなく、サンダルのようなものを履いていたのでしょ。また今のように道路も綺麗に舗装されていませんから、当時の人の足は、泥やホコリでまみれた汚いものだったのでしょ。その足を洗う、または香油を注ぐというのは、その人への愛の表現なのです。

さらに、マリアがイエス様の足に香油を注いだということは、マリアの信仰の告白でもありました。「油を注ぐ」というのは、ギリシヤ語で「キリスト」という意味です。マリアがイエス様に香油を注いだというのは、「あなたこそ、キリストです」「あなたこそ、メシア（救い主）です」という信仰の告白でもあったのです。マリアは、言葉の人ではありませんでした。聖書の中に、マリアの言葉はほとんど書かれていません。マリアは、行動でイエス様への信仰や愛を表した人です。イエス様の話に聞き入ることやイエス様に香油を注ぐことで、自分の信仰や愛をイエス様に表したのです。

最後に一つ、マリアがイエス様の足に香油を注いだのは、イエス様の十字架の死のためでした。7-8節でイエス様は、こう言われます。「**そのままにさせておきなさい。マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです。貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいますが、わたしはいつも一緒にいるわけではありません**」。イエス様は、マリアの行為は、御自身の葬りのため、十字架の死のためだと言われるのです。

マリアは、本当に大切なことを見抜く力があつた女性であつたと思います。マルタが忙しくもてなしをしている時、イエス様の話に聞き入っていました。その時イエス様は、「**どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリアはその良いほうを選んだのです**」(ルカ 10:42 旧訳)。マリアは、「必要なこと」と「どうしても必要なこと」を見分ける力があつたのです。マルタのもてなしは「必要なこと」でした。しかし「どうしても必要なこと」ではなかつたのです。「どうしても必要なこと」は、イエス様の話に耳を傾けることであつたのです。

貧しい人々に施しをすることは、「いつでもできること」でした。しかし、イエス様の葬りのために香油を注ぐことは、「この時にしかできないこと」でした。マリアは、「どうしても必要なこと」「この時にしかできないこと」は何かを考え、それを見抜く力があつたのです。

おわりに

私たちにも「必要なこと」と「どうしても必要なこと」があります。そして「いつでもできること」と「この時にしかできないこと」があります。私たちはそれを見抜き、「どうしても必要なこと」と「この時にしかできないこと」を選び取っていかねばなりません。

マリアは、イエス様の十字架の死のために、300万円も400万円もする香油を一気に注ぎました。それは、ユダが言うように「もったいないこと」なのでしょう。そもそも、イエス様の十字架の死のために、「もったいないこと」などあるのでしょうか。イエス様が十字架で死なれたのは、私たちのためです。イエス様は、私たちの罪を背負って十字架で死なれました。神様の前に罪を重ねてきた私たちに対する神様の怒りと呪い、刑罰を身代わりに受けるためです。私たちを、神様の怒りと呪い、この世と永遠の刑罰から救うために、イエス様は十字架で死なれたのです。このイエス様によって私たちは、永遠の滅びから、永遠のいのちを与えられたのです。そのイエス様の十字架の死に対して、300万円あるいは400万円は、「もったいない」のでしょうか。むしろ、それでは全然足りないくらいではないのでしょうか。一生かかっても借りを返せない、一生かかっても、その恵みに対して十分と言えるお礼などできない、そういうものではないのでしょうか。

神の子であるイエス様が、この私のために十字架で死に、命を捧げてくださったのです。それほど「もったいないこと」はないのです。価高き神の子の命が、この罪深い小さな私のために捧げられる、それほど「もったいないこと」はないのです。その意味で、私たちがイエス様に対してするすべてのことで、「もったいないこと」など一つもないのです。むしろ「足りない」のです。

世の人々は、私たちクリスチャンを見て、こう言うでしょう。献金なんてしてお金が「もったいない」。収入の十分の一も献金するなんて「もったいない」。毎週礼拝に出席して時間が「もったいない」。せっかくの休日が「もったいない」。無償の奉仕なんかして労力が「もったいない」。報酬のないボランティアなんて「もったいない」。世の人々から見れば、私たちクリスチャンは「もったいないこと」ばかりしているように見えます。しかし私たちは、イエス様の十字架の死によって、価高き神の子の命を与えられ、罪からの救いと永遠のいのちが与えられたのです。それに対して、「もったいないこと」など一つもないのです。もし私たちが、献金や礼拝や奉仕を「もったいない」と思うのだとしたら、イエス様の十字架の死を見失っていると云わざるを得ません。またイエス様を裏切ったイスカリオテ・ユダの心が、自分にもあると云わざるを得ません。

私たちにとって、「どうしても必要なこと」「この時にしかできないこと」は、イエス様の十字架の死を見つめ、それに感謝と愛を表していくことなのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、愛するひとり子イエス様を私たちに与えてくださいました。罪深い小さな私

たちには、「もったいないこと」です。しかし私たちは、あなたへの感謝や愛が十分ではなく、「もったいない」とさえ思うユダの心があります。本来は、「足りない」ぐらいであり、一生かかっても、あなたの愛に十分にお返しすることはできません。どうか私たちが、イエス様の十字架の死を見つめ続けることができますように。「必要なこと」や「いつでもできること」に心が奪われて、イエス様の十字架の死を見失うことがありませんように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。